# 八幡の鳥追い祭り（八幡町）調査報告

鈴木　英恵

## はじめに

鳥追い祭りは、田畑を荒らす害鳥を駆除し集落外に追い払う、小正月の民俗行事である。かつて、八幡の鳥追い祭りは毎年１月１４日と決まっていたが、近年は１月成人の日（祝日）に行う。現在、八幡町には住宅地や工場が建つが、昭和４０年（１９６５）ごろは田畑が広がる農村地帯であった。田畑を荒らす主な鳥はスズメ、ヒヨドリ、オナガなどであった。八幡の鳥追い祭りは、八幡八幡宮門前で行う小正月の行事である。明治時代も現在のような屋台があって、お囃子を奏でていた。現在、八幡の鳥追い祭りに出るのは相之田・富田地区（東組）、上馬場・下馬場地区（上下組）、西馬場地区（西組）の３地区である。数年前まで大門・新住宅（大門南組）も出ていたが、近年は子どもの数が少なく出ていない。昭和４０年ごろは、群馬八幡駅前の地区と野宮・地計の２地区も数年間だけ、屋台（山車とも呼ばれる）を出していた。

以下では、八幡の鳥追い祭りの変化と継承に着目する。とくに、聞き書ができた昭和１０年代から同４０年代、そして筆者が民俗調査をした令和６年（２０２４）、同７年（２０２５）の相之田・富田地区（東組）の鳥追い祭りを中心に、その行事内容、屋台、お囃子の継承について述べていく。

## １．八幡の鳥追い祭りの継承と展開

### （１）小正月行事の鳥追い祭り

令和７年における八幡の鳥追い祭りは、相之田・富田地区（東組）、上馬場・下馬場地区（上下組）、西馬場地区（西組）の３地区が出た。各地区では屋台を曳いて町内巡行をした後、３台の屋台が八幡八幡宮門前に参集し、八幡六郷流のお囃子を奏でた。お囃子の構成は大太鼓、小太鼓、笛、摺り鉦である。屋台の太鼓は、屋台太鼓とも呼ばれる。東組の場合、子供連が太鼓を担い、笛と摺り鉦は六郷流保存会が担う。上馬場・下馬場地区（上下組）、西馬場地区（西組）では、太鼓を叩くのは子どもが中心であったが、最近は少子化の影響もあって大人も太鼓を叩く。ところで、西馬場地区（西組）の屋台は、３台の屋台の中でもっとも小型である。屋台銘記札の「屋臺新築　明治三十四年一月十五日」が現存し、さらに屋台底にも「明治三拾四年壱月十五日新調ス」と墨書銘が残る。このことから、明治３４年（１９０１）には八幡で鳥追い祭りが行われていたといえる。２０２５年時点で、少なくとも１２４年前からこの屋台は使用されている。また、相之田・富田地区（東組）の屋台には墨書銘「昭和二十三年十月　新築落成　相之田富田中　棟梁　大塚作次郎　天下泰平　國家安全　五穀豊穣　養蚕倍収」とある。太平

洋戦争後の昭和２３年（１９４８）１０月時点の地域の人びとの願いが屋台に書かれている。東組の屋台は、２０２５年時点で７７年前のもので、今日もその屋台を使用している。上馬場・下馬場地区（上下組）の屋台が造られた年銘は確認中である。

昭和初期の八幡の鳥追い祭りについて、伝承者の櫻井幸雄氏（昭和２０年＜１９４５＞生まれ）、加部光造氏（昭和９年＜１９３４＞生まれ）、新井利實氏（昭和１２年＜１９３７＞生まれ）に聞き書したことを述べてみたい。かつての鳥追い祭りは、道祖神祭りと鳥追い祭りの２つの祭りが、一連の小正月行事として成り立っていた。道祖神祭りは子どもの行事で、子ども達のことをドウソジンコ（道祖神子）と呼ぶ。またこの仲間をドウソジンナカマ（道祖神仲間）ともいった。昭和２０年代の道祖神子に入れたのは男子だけで、その対象は小学校３年生から中学２年生までであった。最年長の中学２年の子をオヤカタ（親方）、その次の子をコヤカタといい、親方の言うことには絶対服従であった。道祖神仲間には親方をはじめ、自分より年上の人に逆らえないような仕組みがあり、目上を立てることが当たり前のように身に付いた。松の内が明ける１月７日の朝、各家庭が正月に飾った松飾りを家の前に出しておくと道祖神子が集めて廻った。各組ごとの大人たちも道祖神子に力を貸し、松飾りを竹の柱に積み上げて道祖神小屋を作った。大正月を迎えるにあたって家の神々に松飾りをするが、それと同様に小正月になると同じ家の神々に繭玉を作って飾った。なかには、座敷の部屋にたくさんの繭玉を飾る家もあり、養蚕の豊穣を願う信仰が根付いていたのである。小正月の１月 14 日の早朝に、正月飾りや松飾りを燃やすドウソジンマツリ（道祖神祭り）が行われた。どんどん焼きとも言った。１４日の夕刻に鳥追い祭りの屋台を町内に曳き出し、他の屋台と一緒に八幡八幡宮前でお囃子を競演した。櫻井氏は、道祖神祭りと鳥追い祭りの関係を、「松飾りを焼くのが道祖神祭り。お囃子の屋台を曳くのが鳥追い祭り」と話された。道祖神祭りと鳥追い祭りの２つの行事が、一連の小正月の行事で、八幡の鳥追い祭りとして人びとに認識されてきたのである。

現在のようにゲームやテレビなどの娯楽が無かった時代、年に一度の八幡の鳥追い祭りは子どもたちにとって大きな楽しみのひとつであった。年長者の親方は、太鼓が上手に叩けない年少者に指導をする役目があった。特訓をして年少者の子が上手になると、屋台に乗らせて太鼓を叩かせた。年少者にとって屋台の上で太鼓を叩けることは、親方に認められたことを意味し、誇らしいことであった。

下記の写真は、相之田・富田地区（東組）、上馬場・下馬場地区（上下組）、西馬場地区（西組）の計３地区の屋台である。これらを見比べると、ほぼ同じ作りの屋台である。屋台上部には紅白のアサガオがつき、そこにたくさんの竹をさし和紙で作った花を付ける。屋台の上に太鼓を乗せ、正面に組名の提灯を６つ設置する。アサガオの下に祭りの提灯を多数下げ、屋台幕を張る。

写真１　明治 34 年製 西馬場地区（西組）の屋台（高崎市八幡町 八幡町第二区西公民館）　2025 年 1 月 13 日撮影

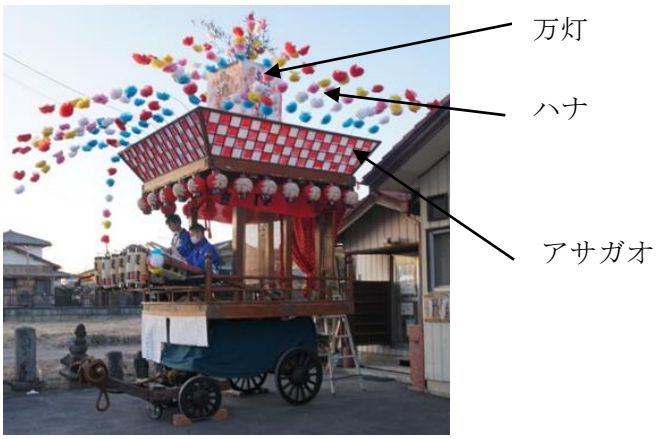



写真２　昭和 23 年製 相之田・富田（東組）の屋台　（高崎市八幡町 八幡町第二区東組公民館）　2024 年 1 月 14 日撮影

写真３　上馬場・下馬場地区（上下組）の屋台（高崎市八幡町）　2025 年 1 月 13 日撮影

## （２）相之田・富田（東組）の鳥追い祭り

伝承者の櫻井幸雄氏によると、明治、大正、昭和の時代八幡町相之田・富田は、農村で田畑に囲まれた地域であった。田畑を荒らす鳥は主にスズメであった。櫻井氏が子どもであった昭和３０年（１９５５）ごろ、道祖神祭り（どんどん焼きとも言う）と鳥追い祭りは、連続して行われる一連の小正月行事であった。大正月の７日に松飾りと正月飾りを下げ、小正月の繭玉飾りへ移行した。道祖神祭りでは竹と藁を用いて小屋を立て、松飾りと正月飾りをお焚き上げにした。道祖神祭り、鳥追い祭りは子供連と呼ぶ子ども組織が行っていた。当時、子供連に入れたのは小学校４年生から中学校２年生までの希望者（参加の強制はしない）であった。女子はいなかった。小正月の１月１４日が鳥追

い祭りで、前日の１３日夜に子供連は、親方の家に泊まって五目飯をご馳走になった。五目飯の具材はニンジン、ごぼう、油揚げ、ちくわ、シイタケであった。１４日の早朝、子供連でどんどん焼きをした。年によっては、隣の地区の子どもが竹と藁の小屋を壊しにやって来ることもあった。櫻井氏が親方になった当時、子供連のリーダーとしてニンベツアツメ（人別集め）・花飾り作り・太鼓の練習・所要物品（花かえし、ローソク等々の購入、収支の会計、残金の子どもたちへの分配金の決定支給等を取り仕切り）の準備などを行った。人別集めは町内の家を訪ね、祭りの運営資金を集めることである。また、花かえしとは、祝い金の返礼品のことである

子どもにとって屋台の上でお囃子の太鼓をたたくことは、祭りの花形でもあった。子どものときに、屋台の太鼓を叩いた櫻井氏は「屋台の巡行での揺れ心地と太鼓のリズムが合わさった気分は、子供心に最高のもので。今でも忘れられない」と話す。

高度経済成長以降、八幡は工業団地として発達していく（１）。昭和４０年代になると次第に専業農家が減少し、農地が宅地へ転用され住宅街に生まれ変わっていった。その用な流れを受け、昭和４５（１９７０）年に、これまでどんどん焼きを行っていた場所に三国コカ・コーラボトリング群馬工場が建設されると、東組のどんどん焼きは絶えた。松飾りを作る家も少なくなり、いまは、毎年広報誌に入ってくる紙製の松飾りを玄関に貼る家が増えた。

### （３）上馬場・下馬場地区　（上下組）　の鳥追い祭り

伝承者の加部光造氏が生まれ育った上馬場・下馬場地区（上下組）は、八幡宮のお膝元に位置することから、元村（もとむら）といった。小正月１月１４日の前に、町内で人別集めをした。人別集めのお金でミカンを買い、皆で食べることもあった。上下組では、どんどん焼きは行ったが、道祖神小屋は作らなかった。道祖神祭りの前日にあたる１月１３日の夜に、親方の家（大体の場合が納屋）でたくさんの五目飯を炊いてくれた。炊き上がると、親方から指示を受けた道祖神子が大声で「めしがねえたぞ（煮えたぞ）、茶碗持って飛んで来い！」と叫び組内を廻った。すると、茶碗を持った子どもたちが集まって皆で仲よく筵の上に座り、五目飯を御馳走になった。親方は集まった子どもたちの顔をよく見て、来ていない家の子がいると、茶碗に山盛りの五目飯を盛って下っ端の子に来ていない子の家まで届けさせた。その際に「道祖神のおみごくです」と言って渡すように、一言加えた。

上下組はどんどん焼きを燃やす１月１４日の朝に、道祖神子が骨組みだけの屋台を組み立て、組中の松飾りを集めた。この屋台に太鼓をくくりつけ、太鼓を叩きながら「どうそじんが燃えるよ、朝寝坊こくなよ」「どうそじんが燃えるよ、繭玉もって飛んで来い」と、道祖神子が大声で組中を呼びまわった。組内の家々を回って集めた松飾りを、現在の八幡八幡宮門辺りの道路の中央に積み上げ、火を点けた。どんどん焼きが始まると、繭玉木の枝に繭玉、スルメ、イカをつけた人が家から出て来た。ある人は、正月神

様（歳徳神）に捧げる餅の下に敷いた半紙を細長く貼り合わせ、「道祖神大笑い」と墨書をして枝につるした。この半紙がどんどん焼きの火で高く上がれば上がるほど、字が上達すると言う、縁起を担ぐ民俗であった。この火で焼いた繭玉、スルメ、イカを食べると、一年間健康でいられるとされた。昭和４０年代以降、養蚕農家の減少に伴い、お正月の門松、注連縄、小正月の繭玉やだるまなど、正月飾りをする家が少なくなると、どんどん焼きも行われなくなった。

## ２．六郷流お囃子の継承方法

### （１）八幡六郷流お囃子の唱歌にみる鳥追い祭り

鳥追い祭りの屋台にはお囃子がある。これは八幡六郷流お囃子と呼ばれ、文正１１年（１８２８）に八幡で生まれた冨加津徳太郎（１８２８～１９０３）が八幡の地に伝えた。六郷流派に関心があった冨加津は江戸に出て、六郷新三郎に弟子入りし芸能技術を身につけ「六郷」の名を踏襲し、新たに「六郷新平」の称を受けた。晩年は故郷の八幡に戻って余生を過ごし、「六郷流囃子」を地元の人びとに伝習させた（2）。八幡六郷流お囃子は「みんば」「しちょうめ」「きりん」「神田まる」「屋台ばやし」「オーマ」「ショーデン（かまくら)」「ショーデン（本ショーデン)」「ショーデン（打つがい)」「そこぬけ」「羯鼓（カッコ)」の計１１演目である。そのうち、鳥追い祭りのお囃子は「みんば」「しちょうめ」「屋台ばやし」「きりん」「神田まる」の５曲である。八幡六郷流のお囃子を絶やさず後世に伝えようと、伝承地では平成７年（１９９５）１１月に八幡六郷流お囃子保存会を結成し、八幡八幡宮社殿内に御芳名額を奉納した。お囃子を指導するのは、八幡六郷流お囃子保存会会長の櫻井幸雄氏、八幡八幡宮太々神楽保存会会長の加部光造氏、八幡町上下組鳥追い祭り保存会前代表 新井利實氏らである。この鳥追い祭りのお囃子は、平成１１年（１９９９）１２月に八幡六郷流お囃子保存会が作成した「八幡六郷流お囃子唱歌」を使用している。

写真４　八幡六郷流保存会の台と小太鼓
（高崎市八幡町 八幡町第二区東組公民館）
2025 年 1 月 7 日撮影

現在のお囃子の練習場所は八幡町第二区東組公民館である。お囃子は、大きな木箱に小太鼓を設置して練習する。木箱の側面に白字で「六郷流お囃子保存会」と書かれている。木箱に設置した小太鼓を叩くことで、屋台の上に乗って太鼓を叩くのと同じ気分が味わえると、地元の大工が手作りしてくれた。地元で鳥追い祭りの屋台や太鼓にかかわった昔の子どもたちが指導者として、後継者育成に力を注ぎ、六郷流お囃子の継承に努めているのである。

このお囃子は、毎年地元の八幡小学校の体育館で行う芸能祭にも参加している。公民館には、昭和５５年（１９８０）と平成１３年（２００１）の芸能祭出演時の六郷流お囃子保存会の２枚の写真が掲げられている。昭和５５年当時の写真は、男性だけがお囃子を奏でていた。後に撮影された平成１３年の写真には、子どもが加わっている。子どもが参加するようになって、観客も増えたくさんの拍手をもらうようになった。六郷流お囃子の知名度が、幅広い世代に高まったからである。

### （２）六郷流お囃子の練習方法　―相之田・富田（東組）を例に―

昭和４０年代以降、八幡の鳥追い祭りでは、どんどん焼きは行われない。いまは、鳥追い祭りの屋台とそれに付随する、六郷流お囃子だけが伝わる。各組では、町内巡行が終わると、八幡八幡宮鳥居前に屋台を参集させ、お囃子の叩きあいを行う。

鳥追い祭りの屋台太鼓は、この祭りの中心である。そのため、お囃子の練習は鳥追い祭りに先立って行われるが、昭和時代は七草が過ぎると行った〔高崎市今昔市民生活資料調査員会・高崎市教育委員会社会教育課編　１９８９　１６５〕。

令和７年時点における東組の子供連は、小学校４年生から中学校２年生までが対象である。お囃子の練習場は、八幡町第二区東組公民館である。櫻井幸雄氏らの指導を受け、年末（１２月２７・２９・３０日）から正月明け（１月５・７・11 日）にかけて計６回行った。練習時間は午後４時から５時までで、一週間ほど集中して行う。練習日の連絡方法は回覧板である。１２月２０日ごろに、子供連の親方（中学２年生の男子）と、八幡六郷流お囃子保存会世話人（櫻井幸雄氏ら）が作ったプリント「鳥追い祭りの『お囃子の練習会』に開催について」を町内に回す。近年、田畑が宅地に変わり、他所から引っ越してきた人も増加し、鳥追い祭りのことまったく知らない人もいる。そのため、プリントには必ず八幡の鳥追い祭りの由来、解説を載せている。以下がプリントから抜粋した内容である。

写真５　大太鼓と小太鼓の練習

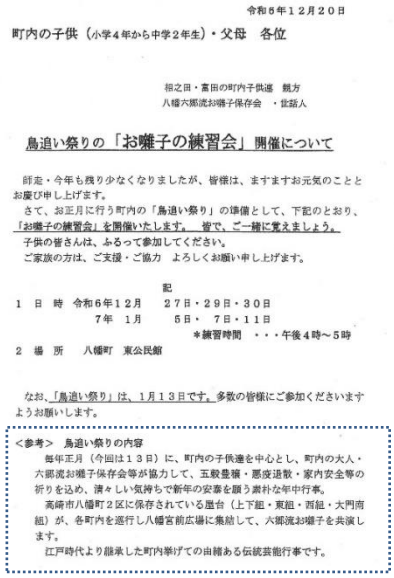
（高崎市八幡町 八幡町第二区東組公民館）

2025 年 1 月 7 日撮影

写真６　鳥追い祭りのお囃子練習の全体

（高崎市八幡町 八幡町第二区東組公民館）

2025 年 1 月 7 日撮影



令和６年１２月２０日

町内の子供（小学４年から中学２年生）・父母　各位

根之田・富田の町内子供連　親方
八幡六郷流お囃子保存会　・世話人

鳥追い祭りの「お囃子の練習会」開催について

師走・今年も残り少なくなりましたが、皆様は、ますますお元気のことと
お慶び申し上げます。
さて、お正月に行う町内の「鳥追い祭り」の準備として、下記のとおり、
「お囃子の練習会」を開催いたします。　皆で、ご一緒に覚えましょう。
子供の皆さんは、ふるって参加してください。
ご家族の方は、ご支援・ご協力　よろしくお願い申し上げます。

記

１　日　時　令和６年１２月　　２７日・２９日・３０日
　　７年　１月　　５日・　７日・１１日
　　＊練習時間　・・・午後４時～５時
２　場　所　　八幡町　東公民館

なお、「鳥追い祭り」は、１月１３日です。多数の皆様にご参加くださいますようお願いします。

＜参考＞　鳥追い祭りの内容
毎年正月（今回は１３日）に、町内の子供連を中心とし、町内の大人・六郷流お囃子保存会等が協力して、五穀豊穣・悪疫退散・家内安全等の祈りを込め、清々しい気持ちで新年の安泰を願う素朴な年中行事。
高崎市八幡町２区に保存されている屋台（上下組・東組・西組・大門南組）が、各町内を巡行し八幡宮前広場に集結して、六郷流お囃子を共演します。
江戸時代より継承した町内挙げての由緒ある伝統芸能行事です。

〈参考〉鳥追い祭りの内容

毎年正月（今回は１３日）に、町内の子供たちを中心とし、町内の大人・六郷流お囃子保存会等が協力して、五穀豊穣・悪疫退散・家内安全等の祈りを込め、清々しい気持ちで新年の安泰を願う素朴な年中行事。（傍線筆者）

高崎市八幡町２区に保存されている屋台（上下組・東組・西組・大門南組）が、各町内を巡行し八幡宮前広場に集結して、六郷流お囃子を競演します。

江戸時代より継承した町内挙げての由緒ある伝統行事です。

図１　太鼓の練習のプリントと鳥追いの説明
（高崎市八幡町 八幡町第二区東組公民館）
2025 年 1 月 7 日撮影

図１は、令和６年（２０１４）１２月下旬に小学校４年生から中学２年生までの子どもがいる家庭に配布された、お囃子の練習案内である。四角の枠で示したのが、鳥追い祭りの説明「＜参考＞鳥追い祭りの内容」である。この祭りの説明には、「五穀豊穣・悪疫退散・家内安全等の祈りを込め、清々しい気持ちで新年の安泰を願う素朴な年中行事」とある。現在は、鳥を追い払う祭りというよりも、新年を迎えるにあたり気持ちを刷新させるような行事の意味合いが強いといえる。前述したように、八幡の鳥追い祭りの中心は屋台、そして六郷流お囃子である。今日まで伝承されてきた六郷流お囃子が、鳥追い祭りを現在まで維持、継承してきたともいえる。ただ、歴史的な文面で「江戸時代より継承した」とあるが、この歴史的なはじまりの詳細は不明である。

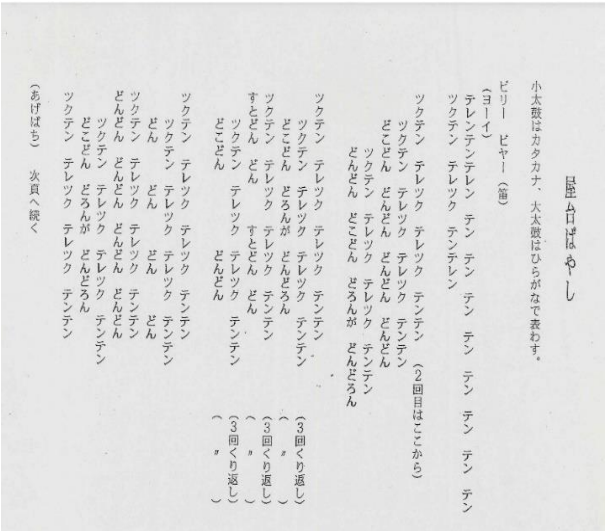
令和７年にお囃子の練習に参加したのは中学校二年生（２人）、中学校一年生（１人）、小学校６年（３人）、小学校４年生（３人）であった。鳥追い祭りに参加している子を、子供連と呼ぶ。子供連のお囃子の練習では、全員で太鼓を叩く。現在、八幡町第二区東組公民館には大太鼓（１）、小太鼓（２）がある。大太鼓は、小太鼓が上手な子が選ばれる。祭りでは、長時間にわたってお囃子を奏でるため、複数人の叩き手が必要である。少なくとも大太鼓は（４人）、小太鼓（６人）の計１０人が必要である。ここで、お囃子の練習についてみていきたい。伝承地では、太鼓を叩くことを「ハタケル」という。太鼓の初心者は、太鼓の代用として長い板木を撥で叩く。撥は櫻井氏の手作りである。六郷流お囃子の練習は、「みんば」「しちょうめ」「屋台ばやし」「きりん」「神田まる」

の計５曲である。太鼓の数が少ないため、交代で使う。初心者は、高学年の子が叩く小太鼓のリズムに合わせながら、板木を叩く。板木で上手に叩けるようになると、櫻井氏が「はい、次は小太鼓を叩いて」と言い、本物の太鼓を叩かせる。初心者の子は本物を叩くと気分が全然違うと話す。太鼓の音が成長度合いを教えてくれるようであった。

桜井氏は全体の様子を見ながら練習を進める。あまりよく叩けない子には、一旦休ませ、太鼓の音に耳を澄ますようにいう。それを何回かくり返して太鼓の音を覚えさせる。

### （３）お囃子の覚え方

子供連は「八幡六郷流お囃子唱歌（しょうか） 平成十一年十二月作成 八幡六郷流お囃子保存会」を見ながら、太鼓の練習をする。櫻井氏と子供連は、このお囃子唱歌を教科書と呼ぶ。これには、太鼓の音が文字で書かれている。小太鼓（カタカナ）、大太鼓（ひらがな）の音を声に出してくり返し読み、覚える。この覚え方を唱歌という。六郷流お囃子で最初に覚える曲は「みんば」である。これができれば、他の曲も覚えやすいという。



屋台ばやし

小太鼓はカタカナ、大太鼓はひらがなで表わす。

ピリー　ピヤー（笛）

（ヨーイ）

テレンテンテレン　テン　テン　テン　テン　テン　テン

ツクテン　テレツク　テンテン

ツクテン　テレツク　テレツク　テンテン　（2回目はここから）

ツクテン　テレツク　テレツク　テンテン

どこどん　どんどん　どんどん　どんどん

ツクテン　テレツク　テンテン

どんどん　どこどん　どろんが　どんどろん

ツクテン　テレツク　テンテン

ツクテン　テレツク　テンテン

ツクテン　テレツク　テンテン

（3回くり返し）

どこどん　どろんが　どんどろん　テンテン

（〃　）

ツクテン　テレツク　テレツク　テンテン

（3回くり返し）

すとどん　どん　すとどん　どん

（〃　）

ツクテン　テレツク　テンテン

（3回くり返し）

どこどん　どんどん

（〃　）

ツクテン　テレツク　テレツク　テンテン

ツクテン　テレツク　テレツク　テンテン

どん　どん　どん　どん

ツクテン　テレツク　テレツク　テンテン

どんどん　どんどん　どんどん　どんどん

ツクテン　テレツク　テレツク　テンテン

どこどん　どろんが　どんどろん

ツクテン　テレツク　テレツク　テンテン

（あげばち）　次頁へ続く

図２　八幡六郷流お囃子の教科書

（高崎市八幡町 八幡町第二区東組公民館）

2025 年 1 月 7 日撮影

櫻井氏は子どもたちを厳しく指導し、「教科書を見てたんじゃ、台車（屋台のこと）の上で（太鼓を叩くことが）できない。暗いなかで叩くのだから。台車の上に乗せられないよ！ちょっと厳しすぎたかな。教科書を見ないで叩けるように」と子どもに言う。

図２が八幡六郷流お囃子の教科書で「屋台ばやし」ある。覚えるコツは、家で何回も声に出すことである。音が覚えられたら、次は膝を手で叩いて太鼓のリズムを取る。このとき、あまり楽譜を見ないようにする。ところで、コロナ禍で３年間、鳥追い祭りが中断した。櫻井氏は「芸能ごとは、３年休むと覚えているかどうかが心配。（コロナ禍で）何年か休んだし。太鼓を叩くのは自転車を漕ぐのと同じ。身体が覚えていれば、太鼓が叩ける」と話してくれた。実際、子ども連で集まって何回か練習すると、皆が覚えていたようで直ぐに太鼓が上手に叩けるようになった。鳥追い祭りの表舞台は太鼓である。六郷流お囃子保存会の櫻井氏、加部氏らは子どもを表舞台に出させようと、一生懸命に太鼓の指導をする。だが、近年問題なのは、お囃子の笛を吹ける若い人がいないことである。東組で笛ができるのは大人３名だけである。鳥追い祭りは子どもの祭りであったが、子どもだけで困難な場面では大人の力が加わるようになった。たとえば、八幡

六郷流お囃子の練習や屋台の組み立て等である。現在、鳥追い祭りだけが引き継がれているが、その背景には、屋台の上で奏でるお囃子を子供連が受け継いできたこと、そして子ども主体の祭りとして成り立ってきた歴史が、今日までこの祭りを維持、継承してきたと考えられる。

## ３．鳥追い祭りの準備

### （１）相之田・富田（東組）の人別集め

祭りに先立ち、相之田・富田では子供連が各戸を訪ね、祭りの運営資金を町内から募る人別集めをする。年が明けると、親方と子供連、子供連の母親たちが、各家のポストに人別集めのご協力のお願いのプリントを配る（図３）。なお、このビラの地名の表記は「相野田」とあるが、正しくは「相之田」である。かつて、人別集めは男子だけの行事であったが、最近は女子も一緒に回るようになった。筆者は、令和７年１月１１日の人別集めに同行する機会を得た。子供連は小学校４年生から中学校２年生までの９人で、分担して全員が相之田・富田の家々を訪ねた。人別の集めでは、法被を着る習慣がある。子供連と一緒に家を訪ねていると、ある保護者が「子どもが心配」とのことで途中から同行することになった。

人別集めでは、親方の指示に従って各家を訪ね協力金（１軒につき５００円）をいただく。各家を訪ねるにあたり、代々の親方が引き継ぐものがある。それは町内の住宅地図と、人別集めの情報（訪ねても何時も留守、あまり協力的ではなく難しい人等）である。人別集めでの指示を出すのは親方で、小さい子に「この家にいって」「次はこの家」と指示して訪ねさせる。人別集めは一人ではなく、必ず二、三人で訪ねる。家の玄関先で呼び鈴を鳴らし「鳥追い祭りの人別集めに来ました！ご協力をお願いします」と大きな声で言う。人によっては、クッキーやお菓子類をくれる家もあった。大体、子どもがいる家は人別集めを知っているので、予め渡しやすいようにジッパーのついた小袋に入れて渡してくれる。人別集めの５００円は、親方が管理する。住宅地図で訪ねた家を直ぐにチェックし、大きなジップロックにお金を入れる。人別を貰った家と留守だった家等にも印をつける。留守だった家には、時間を空けて再度訪ねる。

図３　人別集めのビラ（令和７年）
（高崎市八幡町相之田・富田）
2025 年 1 月 7 日撮影

今年の子供連の親方は、中学２年生であった。コロナ禍以降、久しぶりの参加と話し、「自分で人別集めが上手くいくような方法を考えた」と言い、ゼンリン地図に印をつけ

ていた。〇は留守、☑が（人別の協力金を）もらった家である。チェックの入れ方や印のつけ方など、とくに引継ぎや決まりはなく、その年の親方が決めたやり易い方法で行われる。

人別集めの出発地と帰着地は、太鼓の練習場でもある八幡町第二区東組公民館である。人別集めの道順は、東組の山車巡行とほぼ同じである。最初に、下豊岡方向の家から訪ねて、住宅街を訪ねる。下豊岡寄りの相之田・富田地区の家を訪ね終わると、八幡八幡宮寄りの右側の家を訪ねていく。この順路は、ほぼ屋台の町内巡行と同じである。人別で集めたお金は、祭りの運営に充てられる。祭りの支出代金は、提灯、蝋燭、和紙（花を作る）、屋台のオイル等である。終了後の打上の飲み物、菓子、太鼓の練習のときに子どもに配るジュース代等になる。残金があれば、親方の権限で中学生１万円、小学生２千円などに分配し、残った菓子類や飲み物も子供連でわける。東組では７０年以上前から変わらずに、子供連が町内の家々を訪ねて人別集めを行っている。この人別集めの民俗は強制ではないが、今日まで順調に続けられている。

写真７　子供連の人別集め
（高崎市八幡町 相之田・富田）
2025 年 1 月 7 日撮影

写真８　人別のお金をいただく
（高崎市八幡町 相之田・富田）
2025 年 1 月 7 日撮影

## （２）鳥追い祭りの屋台と飾りつけ

相之田・富田（東組）の鳥追い祭りの屋台は組み立て式ある。ここでは、民俗調査ができた令和７年１月１３日のことを述べる。午前８時半に第二区東組公民館に関係者や町内の人子供連、有志が集まった。屋台は祭り当日の早朝に、公民館の近くにあるお堂から運び出す。まずは、一年間にたまった屋台全体の埃を雑巾で拭いていく。上から順に組み立てようと、屋台上部に紅白の紙を貼った４枚の板を組合せる。

写真９　屋台上部 アサガオの設置
（高崎市八幡町 八幡町第二区東組公民館）
2025 年 1 月 13 日撮影

色合いや姿形から、アサガオと呼ばれる。この板を組み合わせると、花が咲いたようになる。アサガオの周りには、色とりどり（青、ピンク、黄色、赤、白）の花紙で作ったハナ（花）を輪ゴムで竹に結びつける。竹は２４本準備する。この竹に縛った花は、毎年新しいものに作り変える。この竹の花は縁起物で、なかには毎年持ち帰る人もいる

前述したように東組の屋台には「昭和二十三年十月　新築落成 相之田富田中 棟梁 大塚作次郎　天下泰平　國家安全　五穀豊穣　養蚕倍収」と墨書銘がある。終戦後の昭和２３年（１９４８）に製作され、この当時時点での相之田・富田（東組）の町全体における人びとの祈願が国家安全、養蚕倍収などであったことが理解できる。また、屋台幕は赤い生地に子猫が描かれたもので「子供連　昭和五十三年一月吉日　新調　相之田富田」とある。この幕を約５０年使っている。

屋台に飾る用具等は東組公民館で管理している。大きな提灯や幕、太鼓、小太鼓、撥などの重いものは押入、紙箱に入れた提灯などの軽いものは天井裏にしまう。提灯の種類は装飾品の「祭り」、屋台の正面に飾る地域名を施した「東組」の２種類である。かつては提灯に蝋燭を灯したが、いまは電球である。

## ４．鳥追い祭りの町内巡行とお囃子

### （１）相之田・富田（東組）の場合

鳥追い祭りでは、まず町内巡行をする。最後に八幡八幡宮門前へ向かう。町内巡行ではお囃子を奏でながら相之田・富田（東組）の町内を進む。町内巡行が始まる時間は、午後５時で、屋台を曳くのは大人と子どもである。法被を着た子供連は、午後５時前まで同町内の家を一軒ずつ訪ね、屋台を曳いてくれる男性を集めに行く。たくさんの人数が必要なので、子供連の皆で声を掛け合い、力がありそうな人を集めていく。その間、子供連の母親らは東公民館で鳥追い祭りの準備をする。人員が集まると、いよいよ町内巡行へ出発する。屋台の先頭を歩くのは、六郷流お囃子保存会会長の櫻井氏で、手には「六郷流お囃子保存会」の提灯を持つ。そのほかに「八幡伍長」（現、班長）、「八幡区長」の提灯を持つ人が続く。屋台に乗れるのは子どもだけである。１人がオオダイ（大太鼓）、３人がコダイコ（小太鼓）で、大人は屋台に乗れない。六郷流お囃子保存会の人が笛と鉦をそれぞれ屋台の傍で奏でる。一台の屋台にかかわるのは１５人くらいで、太鼓の交代要員を含むと子どもが８人、屋台を曳く大人が７人程度である。

町内巡行が始まると、人別集めとは別に、近所の人から鳥追い祭りのご祝儀としてハナダイ（花代）をいただく。屋台囃子の音色が近づくと、近所の人が門の前で、屋台が来るのを待ち、家の近くまで来ると親方、年長者に花代を渡す。花代をいただい親方らはお礼を言うと、屋台の後ろを歩く何人かの母親のもとに走り出し、祝儀を渡す。すると、一人の母親は大きな画板と半紙、毛筆のペンなどを持っていた。直ぐにその場で、いただいた金額の倍の金額、寄付者の名前を書く。もう一人は文字を書く人の手元を懐

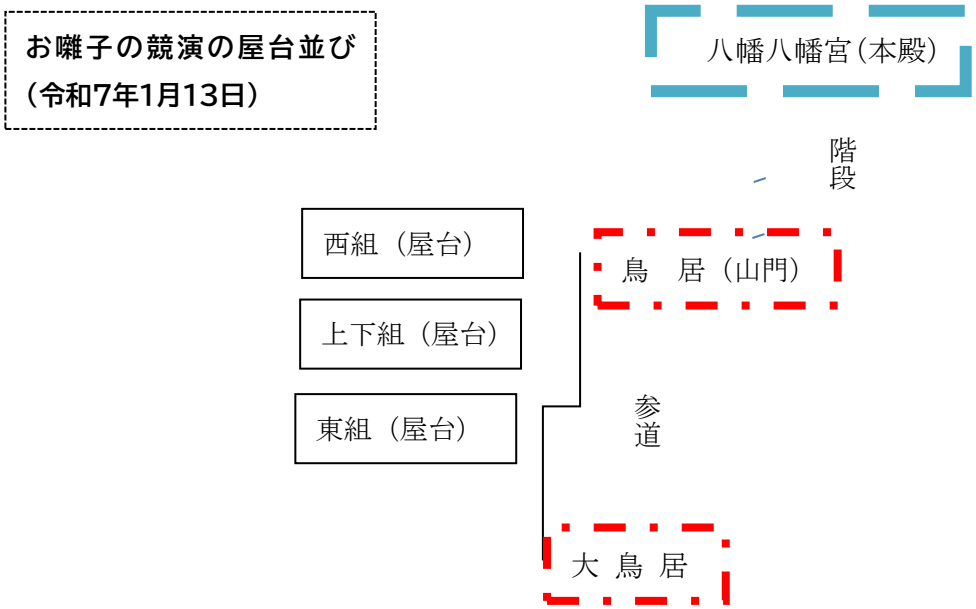
中電灯で照らし、糊で屋台の正面に貼った。屋台が八幡八幡宮の山門に面する道路へ出ると、町内からのご祝儀は一切もらわない。

相之田・富田（東組）では、花代の金額を倍にして書く習慣が、昔から受け継がれてきている。花代のお返しはハナガエシ（花返し）で、令和７年の返礼品は、みかんとペットボトルのお茶であった。これを渡すのは親方、子供連の役目である。鳥追い祭りの主体は、過去も現在も子どもである。そのことを示すように、花代をいただくのは子供連の親方、年長者であって、返礼品の花返しを渡すのも子供連の役目である。このように、八幡鳥追い祭りそのものを進めていく中で、常にその柱となるのは子どもの存在である。子どもが祭りを進めるにあたり、町内の人びとも協力をしている。ただ、花代を墨書で半紙に書くなど、少子化の影響で子どもの代わりにできることを母親らが率先して行っているようである。

### （２）八幡八幡宮に参集する屋台、お囃子競演

相之田・富田から、八幡八幡宮に面する村境まで来ると町内巡行が終わる。おおよそ午後５時５０分ごろ、「みんば」の笛が入って町内を出て、八幡八幡宮へと向かう。午後６時ごろ各町内が巡行を終え、八幡神社の門前に東組、上中組、西組の３台の屋台が集結した。ここで、一斉にお囃子の叩き合いをする。これには各町内のお囃子の競演、そして氏子によるお囃子の奉納の意味がある。午後６時半ごろ、一斉に３つの組が屋台から見物客に向かって「福投げ」と称し、菓子類を撒く。その間も、屋台ばやしが賑やかに響き渡る。屋台ばやしが奏で終わると、八幡六郷流お囃子の保存会長の櫻井氏が挨拶をし、鳥追い祭りの説明もあった。それによると「新年の清々しい気持ちの中、江戸時代から２００年続く鳥追い祭りを通して、五穀豊穣・悪病退散・家内安全・町内繁栄等を祈願する。子どもの成長・合格祈願・交通安全・厄除等も祈願する」といい、最後に「『鳥追い祭り』は、祭りの準備、運営、直来等を町内の子どもたち、大人たちが連携・協力して実施し、相互の親睦と絆が深まる。大切な伝統ある年中行事として継続して行いたい」と話された。

午後６時５５分ごろ、３台の屋台が一列に並ぶ。令和７年は、八幡八幡宮にもっとも近い場所に西組（屋台）、中央に上下組（屋台）、その隣が東組（屋台）であった。屋台が揃うと一斉にお囃子の「みんば」「しちょうめ」「屋台ばやし」「きりん」「神田まる」を二回ずつくり返す。午後７時１０分ごろまでお囃子を競演し、その後、再び最初に集まった定位置まで屋台を曳き、もとの道に戻る。令和７年の鳥追い祭りは、主催者側にあたる３地区の総勢人数は約６０人である。観客は近隣を中心に２００人ほどであった。




東組の場合、屋台が町内に戻る際、来年に太鼓が叩けるような見習いの子を、屋台に乗せて本物の太鼓を叩かせる。ここで予め、お囃子の臨場感を知ってもらう。出発地の八幡町第二区東組公民館に到着すると、組み立てた屋台を骨組みだけにする。子供連は公民館内の片付けをする。屋台の骨組みは公民館の傍にあるお堂に男性が収納する。最後に、公民館内で慰労会をし、鳥追い祭りが終了した。

写真 10　屋台３台によるお囃子の競演
（高崎市八幡町 八幡八幡宮前）
2024 年 1 月 7 日撮影

写真 11　八幡八幡宮山門前での叩き合い
（高崎市八幡町 八幡八幡宮前）
2024 年 1 月 7 日撮影

## まとめ

八幡の鳥追い祭りには、鳥追い唄や囃し立てるような言葉、掛け声は伝わっていない。しかし物を叩き、音で鳥を追い払おうとする太鼓中心のお囃子、屋台同士での叩き合いが行われることに特徴がある。八幡八幡宮は上野国一社の武神であり、氏子をはじめ周辺地域の人びとの精神的な支えであった。また、八幡八幡宮の門前は多くの人びとが行き交う都市的な面もあったことから、華やかな鳥追い祭りの屋台と六郷流お囃子が発達してきたといえる。今日まで、小正月祭りの欠かせない祭礼行事として、八幡の鳥追い祭りの屋台と六郷流お囃子が順調に継承されている。お囃子は人から人へ学び継がれるものである。

昭和２０年代の鳥追い祭りは、道祖神子（ドウソジンコ）と呼ぶ小学校３年生から中学２年生までの男子だけで、まず人別集めをし、小正月１月１４日の早朝に道祖神祭り（どんどん焼きともいう）、夕方に鳥追い祭りで屋台巡行を行った。この伝承地では道祖神祭り、鳥追い祭りの２つの行事が一連の鳥追い祭りとして成り立っていた。鳥追い祭りの中心は子供連で、屋台の上で太鼓を叩いた。過去の子供連は小学校３年生から中学校２年生までの男子が対象であったが、令和７年（２０２５）時点では小学校４年生から中学校２年生までの男子、女子が屋台の上で太鼓を奏でるようになった。

令和７年の八幡鳥追い祭りは、１月１３日に行われた。現時点の鳥追い祭りは、東組、上下組、西組の３町内が鳥追いの屋台を曳き出し、六郷流お囃子を奏でながら各町内巡行をすることでる。最後に八幡八幡宮前に各３台の屋台が参集し、お囃子を競演する。鳥追い祭りの過去と現在で大きく変わったことは、昭和４０年前半以降、どんどん焼きがいずれの地域でも廃止されたことである。一方、相之田・富田（東組）を例に、現在も受け継がれている民俗は、鳥追いの屋台と六郷流お囃子、人別集めである。

伝承者の櫻井氏、加部氏、新井氏をはじめ、多くの関係者が八幡鳥追い祭りの後継者育成に力を注いでいる。現在の鳥追い祭りは町内の子どもだけではなく、町内の大人や六郷流お囃子保存会の２つの支えがあって成りたっている。このことは、継承者の変化といえる。さまざまな地域の要因が重なった結果、屋台の組み立てやお囃子の練習などに、六郷流お囃子保存会と大人が関与するようになって、現在の鳥追い祭りが形成され、定着した。このことからも、無形民俗の六郷流お囃子を通し、有形民俗の鳥追い屋台が維持され、今後も地域の祭りとして受け継がれると考える。

**【謝辞】**

八幡の鳥追い祭りの民俗調査では、櫻井幸雄氏、加部光造氏、新井利實氏、そして相之田・富田地区（東組）、上馬場・下馬場地区（上下組）、西馬場地区（西組）の皆様には大変お世話になりました。感謝申し上げます。氏名の掲載については、ご本人に許可をいただきました。記して、お礼申し上げます。

≪註≫

（１）高崎市内でもっとも古い工業団地は、八幡工業団地である。昭和３４年（１９５９）４月に高崎市都市建設設備協会が分譲を開始し、昭和３６年にミツワ化成（現、Ｐ＆Ｇ)、昭和４５年（１９７０）に三国コカ・コーラボトリングが操業をはじめた〔高崎市市史編さん委員会編　２００４　７６６～７６７〕。

（２）八幡六郷流お囃子の種類は計１１演目で、シッチョーメ、カンダマル、屋台ばやし、キリン、オーマ、ショーデン（かまくら)、ショーデン（本ショーデン)、ショーデン（打つがい)、そこぬけ、羯鼓（カッコ）である〔高崎市今昔市民生活資料調査員会・高崎市教育委員会社会教育課編　１９８９　１３０～１３１〕。鳥追い祭り以外では、八幡八幡宮太々神楽の餅投げ（福投げ）のときに躍動的な曲「屋台ばやし」を奏でる。

≪参考文献≫

群馬県史編さん委員会編　１９８２　『群馬県史 資料編２６ 民俗２』　群馬県

群馬県史編さん委員会編　１９８０　『群馬県史 資料編２７ 民俗３』　群馬県

近藤義雄　１９９６　『上州の神と仏』　煥乎堂

高崎市今昔市民生活資料調査員会・高崎市教育委員会社会教育課編　１９８９　『今昔市民生活資料調査報告書　豊岡・八幡の民俗』　高崎市史編さん室

高崎市市史編さん委員会編　２００３　『新編 高崎市史 資料編１４ 社寺』　高崎市

高崎市市史編さん委員会編　２００４　『新編 高崎市史 通史編４ 近代現代』　高崎市

高崎市市史編さん委員会編　２００４　『新編 高崎市史 民俗編』　高崎市